



草原

これは夢だよ。

その言葉は、絶えず吹き続ける暖かで柔らかい風に流され、薄れていった。

「知ってるよ」

少女は後ろ姿を見せたまま呟いた。地平線に顔を半分隠した夕日が彼女の影を黒く染めている。その長い金髪が揺れ、眼前に広がるライ麦畑のように黄金色に輝いた。

畑はどこまでも広がっている。そう、本当にどこまでも広がっていた。地平線を越えた先、その先にあるのもまた、波のように揺らめくライ麦畑だけだ。

「なのに、楽しいのかい？」

少女の小さく映る姿を見ながら、少年は口を開く。少女の髪と違い、少年の髪はこの場所では不自然に目立つ黒色の髪だ。

「夢は楽しいのよ」

少女は振り返り、小さなえくぼを見せ、微笑む。真っ白なワンピースには、その暖かな色の肌がよく映えていた。少女の笑顔を見た少年は、少女よりも大げさに、噛み締めた歯を見せて笑う。

静かな波が二人の間を流れていく。彼らは腰までその金色の海に浸り、たった二人、無限の海にポツンと浮かんでいた。音も無く燃えている空の下で、海は絶えずざわめく。その穏やかな波の音こそが、この世界に彩りを与えていた。

「ねえ、ずっとここにいなよ」

少年が笑顔を崩さず、唐突に言う。

それを聞いた少女は、無邪気で、どこか恥ずかしそうな小さい笑い声と一緒に、ただ微笑むだけだった。

目を覚ました時、サラは傍らに自分の娘が眠っている事に少し驚いた。彼女は長く美しい金髪をかきあげて、娘をまじまじと見つめる。

狭い病室の窓からは眩しい光が差し込み、今日がとっくに始まっている事を示している。だというのに、^{えみ}恵美は母親のベッドに、授業中に居眠りでもしているかのように突っ伏して寝ている。

サラは上半身を起こし、恵美の肩を揺さぶる。

「ほら、恵美。起きなさい」

恵美は少し唸ったかと思うと、すぐに起きた。それこそ、居眠りを注意されて飛び起きたようだった。

「あ、お母さん。もしかして私、寝ちゃってた？」

「人を呆れさせるくらい、ぐっすり」

髪がクシャクシャになった寝起きの娘の顔を見て、サラは優しく微笑む。恵美はそんな母親の笑顔に気付かずに窓に目を向けながら、腰を摩っていた。

太陽の日差しは恵美の短い金髪を少しだけ輝かせる。

「うー、腰が痛い」

「そんな体勢で眠るからでしょ」

恵美は年齢の割にはずいぶんと可愛らしい顔をしかめる。一つ、サラは短い溜め息をついた。

「どうして私が寝た後に帰らなかったの。大学、もう始まってでしょ？ 大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。今日は全部休講になったの。だからたまには、久しぶりにお母さんと一緒に眠りたいなって」

腰を摩りながら恵美はそう言い、最後にわざとらしい大げさな笑顔でサラに向けた。ふと、サラは恵美の頭に手を置き、ゆっくりと撫でながら口を開く。

「もう。最近毎日会いに来てくれるじゃない。もしかして、サボってるわけじゃないわよね？」

「違いますー。もうすぐ退院するんだから、気を使ってあげてるの。ほら、すっかり病院の空気に汚染されちゃってると思うから、なるべく私が外の空気を持ってきて、慣れさせてあげようっていう最高の気遣いだよ」

少しふて腐れたように言った恵美に、サラは拳骨で頭を小突いた。

「失礼になるような事言わないの。それに、余計なお世話よ。あなたはしっかり勉強してなさい。画家になれないわよ？」

「それこそ余計なお世話ですー。なれますよーだ」

恵美は「イー」と歯を見せてサラをからかい、サラは再び彼女を小突く。その後、二人とも笑う。

ふと、おもむろに恵美は視線を下に向けたかと思うと同時に、笑顔を引き攣らせた。

「うわっ、やっちゃった……」

恵美の視線を追ったサラが見つけたのは、自分の足を暖かく包む真っ白な掛け布団の、黒いシミだった。サラはそれが何かすぐに察する。

「アイシャドウ？」

「ごめん……。寝た時についちゃったみたい」

顔を引き攣らせたまま恵美は白状した。

おちょこ一杯を零したほどのシミは、まるでそこだけ少し焦げたようで、ちょっとやそっとじゃ消す事は出来ないだろうなど、サラは思う。化粧をしないサラは「これだから化粧品は……」と肩をすくませる。人を化かせて、汚れまでつけて、手間ばっかりの発明品だ。

サラは恵美に注意の一つでもしようと思顔を向けたが、恵美のアイシャドウがほとんど落ちてしまっていた目を見て、ふと、口をつぐんだ。その代わりに、少し大げさな苦笑いを恵美に見せる。

「仕方ないわね。看護師さんにはちゃんと謝っておくから。それよりも、お化粧直さなくてもいいの？」

怒られる事を覚悟していた恵美は一瞬、驚きの表情を浮かべた。それからすぐに、不思議に思っている声色で言う。

「う、うん。ありがとう……。じゃあ、ちょっと行ってくるね」

恵美は椅子から立ち上がり、脇に置かれていた茶色の肩掛けバッグから小さい黒のポーチを取り出して、スライド式の白い扉を開けて出て行った。

自動的に扉はゆっくりと閉まっていった、それを確認したサラは黒いシミに手を伸ばす。ちょっと擦っただけで黒い汚れが手についた。

汚れはほんの少しだけ湿っていた。

「恵美、どうして泣いていたの？」

真っ白で、色のない部屋の中で一人、サラは静かに呟く。

自分が眠った後の暗い病室で、恵美が自分にすがりつくようにして泣いている姿を思い、サラは胸を痛めた。

窓に目を向ける。

その中だけは色があって、そこには穏やかな青色が広がっていた。

病室の扉をノックもなく開けたのは英二^{えいじ}だった。

彼は身の丈にこの上なくフィットしている黒のスーツを身にまとい、黒髪も撫で付けるようにセットされている。しかし風貌こそは真面目でも、その顔は気さくな性格をイメージさせ、学生の頃のあどけなさがまだ抜け切っていないのが見て取れた。

英二は病室に入るや否や、恵美のバッグを見つけてサラに顔を向ける。

「母さん、恵美も来てるの？」

「ええ。廊下で見かけなかった？」

サラはベッドから背もたれを起こして腰掛けており、依然足を布団に包んでいた。ふと、英二は布団の黒いシミに気付くが、特に気にせずすぐに目をそらす。

「いや。多分、入れ違いになったんだと思う」

英二はそう言いながらサラの足下、ベッドの先の所まで進み、そこで止まってサラと正面で向き合える位置に立った。

「椅子持ってきて座りなさいよ」

サラは恵美が座っていたのと同じ、窓際に置かれている小さい丸椅子を指差す。

「いや。会社に行くついでに寄っただけだし、そんなに長居は出来ないからさ」

そう言って英二は左腕の腕時計を確認する。それから英二はやっとサラに目を合わせた。

「母さん。俺さ、アメリカに行くの、やめるよ」

唐突に、英二はいたって明るい口調で淡々と言った。サラは目を丸くする。

「……どうして？」

「恵美を放ったらかして、どこかに行っちゃうのはマズいでしょ？ まだ大学生なんだし、母さんだけに押し付けて行くのは良くないよ」

相変わらず英二は淡々としていた。そんな彼を見てサラは大きな溜め息をつく。

「英二、私や恵美の事は気にしなくていいのよ。あなたはあなたのやりたい事をやりなさい。私だってもうすぐ退院出来るんだし、家の事だって心配は要らなくなるわ。私たちの事を気に掛けてくれるのは嬉しいけど、そのせいで英二に迷惑かけるんなら、かえって私たちの方の心持が悪くなるわ」

ふと、英二は笑みを浮かべる。

「やりたい事をやれって言うんなら、俺は日本に残るよ。俺は、日本でこの仕事に憧れたからこそ、この仕事をしたいって思ったんだ。確かに向こうは世界最高峰のチームかもしれないけどさ、そこは俺の夢じゃない。俺の夢は、俺に夢のような事が起こるって事じゃない。俺の夢の場所で、夢のような事が起こるっていう事なんだ」

「……また、よく分からない屁理屈並べて。まったく」

サラは呆れた笑みをこぼし、英二は「それほどでも」と言うように得意げな顔をした。

「でも、母さんの故郷も見てみたかったけどね」

唐突に英二は言う。サラは英二から目をそらし、しばらくしてから気恥ずかしそうに口を開

いた。

「でも、住んでいたのは赤ちゃんの頃だけだったから。確かに故郷だけど、何にも知らないのよ」

「それでも、母さんが生まれた大切な場所だ」

突然、扉が開いた。二人が驚いて目を向けると、恵美が急ぎ足で病室に入ってくる所で、彼女も二人の視線に少し驚き、扉に手をかけたまま固まった。

「なに……二人して。てゆーか、お兄ちゃん来てたんだ」

「来ていました」

英二がわざとらしい会釈と共に素っ気なく答えた。

恵美は英二の返事に少し膨れっ面をして、英二を無視するようにスタスタと自分のバッグが置かれた場所まで歩いて行き、化粧品の入ったポーチをバッグにしまう。

そんな二人のやり取りを見て、サラは微笑む。

バッグを手にポーチをしまいながら、恵美は英二の方も振り向きもせずに出し抜けに聞いた。

「会社は？」

言われて英二は思い出したかのように左腕を確認する。表情は落ち着いていて、至って冷静だったが、英二は素早くサラに顔を向けた。

「じゃあ俺、もう行かないと。もし寄れたら、帰りにも寄るから。それと、恵美。ちょっと話があるんだ。着いてきて」

「えー？」

嫌そうな顔で恵美は振り返る。だが英二の威圧するかのような目にたじろぎ、恵美は溜め息をついて肩を落とした。子供の時から、恵美は英二の真面目な顔には極端に弱い。

「じゃあ、お母さん。ちょっと行ってくる。すぐ戻ってくるから」

しぶしぶ、といった感じで恵美は病室からバッグを置いたまま出て行った。「おい、先に行くなよ」という英二の呼びかけも聞こえていないように、無視する。

「まったく。じゃあ母さん、またね」

「ええ。行ってらっしゃい」

足早に病室を出て行く英二の後ろ姿を、サラは微笑んで見送った。

病院前に続く歩道を、駅の方角に向かって二人は歩いていた。

大学病院の目の前だけあって、片側二車線の道路は車の通りが激しく、歩道を歩く二人の声はお互いに聞き取りにくい。清々しい青空の下に吹いてくる心地よい風は、車が巻き起こす乱暴な風に消し飛ばされていた。二人はとてもじゃないが面白い事を話している顔ではない。恵美は顔を俯かせてさえている。

「結局、母さんには話してないのか」

英二は遠くにある信号を見つめながら、口を開く。丁度その時に、信号が点滅し始めた。

「言えるわけないでしょ……」

俯きながら、呟くように恵美は言う。英二は信号から恵美へと視線を移した。

「大学を辞める事、母さんが気付かないって本当に思うのか？」

「大丈夫だよ……」

恵美は消え入りそうな声で言う。英二はその言葉を聞き流すようにして、また遠くの信号に目を向けた。

「正直に言った方が、隠すよりも母さんは悲しまないと思うぞ」

恵美は何も言わない。

二人はしばらく黙って歩いた。気が付けば病院の敷地はもう通り過ぎ、大きな公園の前を進んでいた。病院に隣接して造られたこの公園は、周りの低い鉄製の柵に沿うように木々が植えられ、隅っこの方に子供用の遊具が設置されている。敷地の大半はグラウンドのような硬い砂地で、平日であれ休日であれ、ゲートボールを楽しむ老人たちの姿を二人ともよく見かけていた。しかし今はまだ朝早い為か、誰もいない。

車の風から逃げるようにして公園には風が吹き込み、木々が気持ちよさそうに揺れていた。

英二はずっと眺めていた信号の道路を挟んだ向かい側の所で立ち止まる。丁度信号が点滅し始めた所だった。信号は赤色に変わり、二人にだけ「止まるように」と命令をする。

そこでふと、英二は口を開いた。

「でも母さん、すごく喜んでると思う」

恵美はゆっくりと恵美の方を見て「え？」と疑問の言葉を投げかける。英二は一瞬気恥ずかしそうに視線を下げるが、すぐに信号に視線を戻した。

「母さん、すごく喜んでるよ。恵美が毎日会いに来てくれてさ。言っではくれないけど、恵美が来ると決まって楽しそうなんだ」

彼女はキョトンとして兄を見つめていた。不意に、英二は恵美に視線を向ける。目が合ったからか、彼は気まずそうに苦笑いをして言葉を詰まらせた。信号が青に変わった。その事を知らせる音が辺りに鳴り響き、周囲の車のアクセルが踏み込まれた音が行き来し始め、英二は音と同時にまた視線を下げる。

「だから、今の母さんには恵美が必要なんだから、恵美が悲しんだりしちゃいけない。恵美は泣き虫の俺よりも強いんだから。だから、迷うなら言わなくていい。その代わりに、ずっと母さんの

側で笑っている事」

英二はそう言って、真面目な顔つきで恵美の方を向いた。だけどそれはいつもの威圧的な目ではなく、優しく、頼もしささえ感じられる深い目だった。見守っていると囁くような、勇気をくれる瞳だった。

始めはポカンとしていた恵美だったが、やがてゆっくりと言葉の意味を飲み込み、そしてまたゆっくりと俯いて、無言のまま軽く頷いた。一つ、英二は溜め息をつく。溜め息まじりの笑みを見せる。恵美はそれに気が付かない。

信号が点滅を始める。英二はふと顔を上げると、その点滅し始めた信号に気付く。突然、恵美の頭をクシャクシャと撫でた。恵美が驚いて顔を上げた時には、英二は駆け足で、恵美に一瞥もくれる事もなく渡り始めていた。だが兄の手の温かさはまだ残っている。慌てて駆ける彼の後ろで、恵美は思わず微笑んでいた。

英二が道路を渡り切り、ふと、道を挟んだ恵美に振り返った瞬間、たくさんの車が彼らの前を横切り始め、あっという間に、お互いの姿を確認する事が困難になる。

それでも英二は見え隠れする恵美に、右手を大きく振った。しかし恵美は英二の方向を確かに見ているはずなのに、反応がない。

目の前の車の流れは声だけでなく、自分の動作までも消してしまっているのではないかと、英二は怪訝に思う。

だがそんな事を考えている矢先、英二に、小さく、恵美の声が届いた。英二は手を振るのを中断し、耳を澄ます。

「いってらっしゃーい！」

恵美は両手をメガホンにして、叫んでいた。英二にちゃんと届いたと安心出来るまで、何度も。

英二はおかしくなって、少し笑ってしまう。

「いってきます！」

英二も両手をメガホンにして叫んだ。

声は一度で恵美に届き、彼女は笑顔で、大きく右手を振る。英二は自分の声が届いたのを確認すると、安堵の表情と一緒に軽く息を吐き、恵美に背中を向けて歩き出した。

再び信号が青になった時、恵美の目には駅への道を急ぐ英二の背中が、小さく映っていた。

少女は小さな田舎道に立っていた。

舗装もされていない、大きさの違う石がいくつも転がる粗末な砂利道は、無限に広がる草原の真ん中に、同じようにどこまでも、真っ直ぐに続いている。空に太陽はない。けどそこには、小さなロールパンを千切ったような雲が、深い海に浮かべられたようにあって、少女がいる場所は暖かった。

風は吹かない。草原の背の低い雑草たちはざわめかずに静かに佇んでいる。雲も形を変える事もなければ、動かない。

静かだった。時間が止まっているかのように。

「僕はこの道の先には、海があると思うんだ」

少女の後ろにふいに現れた、黒髪の少年が口を開く。

静かな空間に突然現れたその声は、すぐに辺りにバラバラに散ってしまい、幻聴だったと思わせるくらいに再び静かになる。

「君は誰だい？」

少年が少女に尋ねる。

「サラよ」

サラは振り向き様に少年に言った。白いワンピースがフワフワと揺れ、止まる。

「あなたは？」

サラはその手を後ろで組みながら、首を傾げて少年に訊く。

少年は肩をすくませて、恥ずかしそうに笑った。

「それが、分からないんだよ。気が付いたらこんな場所にいたんだ。一体、僕は誰なんだろうね？」

そこで唐突に、少年はサラを指差す。正解の答えがひらめいたんだ、と報告するような仕草だった。

「でも考えてみれば簡単だった。なぜなら、これは夢だからさ。だから、この世界では僕は何者でもない。何もする必要がないから、名前もないんだ。それに、僕の目の前にこんなにも美しい人がいきなり現れたのが、何よりの証拠さ」

少年はまっすぐサラを見つめる。辺りにはまた静寂が訪れた。

サラはしばらく目を丸くして、キョトンとして、そして笑った。静かな湖に、小さな波紋がいくつも広がっていくかのような、弱々しくて、透き通って綺麗な笑い声だった。

「当たりでしょ？」

少年は自信満々といった感じで、誇らしげな笑みを浮かべながら、しかも腕を組んで言う。サラは笑いたい気持ちを無理矢理押し込んで、一呼吸置いてから口を開いた。

「おかしな人。夢はあなたの方でしょ？ 私は私の事、ちゃんと分かってるわ。それに、私はあなたの事を知ってる」

少年はまた肩をすくませて、今度は呆れたように笑う。

「なるほど、こういう仕組みの夢なのか」

「どういう仕組み？」

「僕が世界中の誰よりも孤独になる仕組みさ」

サラはまた笑った。そして今度はすぐに口を開く。

「私、あなたによく似ている人を知ってるわ。あなたみたいに、よく分からない事をよく言う人。英二って言うの」

「そうか、それが僕の名前か」

少年は納得した口調で、わざとらしく頷いた。

「違うわよ。彼は車のデザイナーなの。アメリカの有名なメーカーにスカウトされちゃうほど凄い才能を持っているのよ」

サラは優しく微笑んで訂正する。

それを聞いた少年は、顔をしかめて、頭を掻いた。

「おかしいなあ。僕に才能があるのは何となくそんな気がするんだけど、車にはあんまり興味がないと思うんだけどな」

「だから、あなたは彼じゃないわ」

サラが溜め息まじりに言って、微笑む。

「じゃあ、僕は誰なんだい？ 君は知っているんだろう？」

少年は期待を込めた目でサラを見つめた。ついでに、といった感じに少しだけ、はにかんでも見せる。二人はほんの少しだけ見つめ合う。だがやがて、サラはその微笑みをゆっくりと崩していった。

ふと、サラは何か言おうとしたのか口を開きかけて、結局何も言わずに少年から目をそらしてしまう。そして、小さな溜め息を一つついた。

少年はおかしいと思ったのか、不安そうな顔をサラに向ける。

「どうしたの？」

サラはゆっくりと、再び少年を見つめる。

「英二の事、誰だか分からないの？」

少年はキョトンとする。

「やっぱり僕なの？」

「違うって言ってるでしょ」

サラはまた少年から目をそらして、大きな溜め息をつく。

少年は少し困った、という顔をしてから肩をすくませてみせた。それでもサラが気付いたか疑問に思った為、念のためにもう一度、わざとらしく肩をすくませた。

次に「やれやれ」という言葉とともに、右左へと、首を振る。そしてサラを見る。

「僕は自分の名前も知らないんだ。他の人の事なんか知らなくて当たり前じゃないか。現に僕は君の事も知らないよ。たかが夢のくせに、どうしてそんなに君は気難しいんだ？ 夢の外で、僕は君に何か気の触る事でもしたのかい？」

サラは顔を上げて、少年をジッと見据える。まるで睨みつけられているようで、少年は少した

じろいだ。

「あなただって、夢のくせにどうして知らないのよ？ 知らないくせに、どうして私の夢に出てくるのよ？」

「待てよ、どうして僕が一方的に文句を言われるんだ？」

無茶苦茶な言葉だと、少年は反論するように語調を強める。

だがサラはそれよりも遥かに強い口調になっていた。

「あなたが悪いからでしょ！ あなたはいつもいつも……いつも忘れてる！ ほんとうに……」

突然、サラはしゃがみ込んで、顔を伏せてしまう。

「せっかく会えたのに……すごく大切な事なのに、何にも教えてあげられないじゃない……」

目の前で少女がいきなりしゃがみ込み、苦しそうな嗚咽と一緒に激しく泣き出したせいで、少年はひどく狼狽えた。思わず少年は振り返り、また前を見て、地平線の先まで続く道を確認する。だが人の目を気にした所で、この夢には初めからサラと少年の二人しかいない。

サラの大きな泣き声は、音のない世界の全てに響いていた。だというのに、草も、雲も、相変わらず無関心であるかのように身動き一つしない。

乾いた地面に一粒ずつ染み込んで次第に広がっていくサラの涙を見て、これは夢だ、と必死に心の中で言い聞かせつつも、少年は深刻な罪悪感に刈られていた。

「ねえ、お願いだから、泣き止んでよ」

少年はしゃがみ込むサラの肩に優しく手を置いて、出来得る限りの優しい声で懇願する。だがサラの様子は一向に変わらなかった。

少年は頭をクシャクシャと激しく搔いて、身悶えるかのような苦しげな声を出す。そしてしゃがみ込んで、サラの目の前に顔を持つてくる。

「……僕が悪かったって。絶対、絶対思い出すから。だから、泣き止んでよ」

サラに声はまったく届いていないのか、彼女は泣き続ける。

もう、何が悲しいのか考えようとしてもはつきりと考えられない。ただただ、悲しい。悲しい想いだけが、心の中で渦巻いていて、無性に苦しい。目の前が真っ暗で、とても怖い。だから、流れる涙を止めたいのに、どうしても止められない。

自分の手に滴り落ちる涙は彼女にとってはひどく冷たく、重たかった。泣いている自分がひどく惨めに思え、蹴飛ばしてやりたかった。

その時、ふと、自分の身体を暖かいものが包み込む。

少年の腕だった。

少年は衝動的に、だけど優しく、サラを抱えるようにして包み込み、自分の胸の中へ抱き寄せる。

「ごめんって……サラ」

少年は呟くように言った。

サラは何が起こったのかしばらく理解出来なかったが、頭の中に響いてくる少年の心臓の鼓動で、やがて気付く。

サラはゆっくりと、少年の真似をするかのように、少し震わせながら、その暖かい背中に手を

回した。

また、涙が零れた。

また、とめどなく溢れて、どんどん苦しくなっていた。だけど、今度は恐くなかった。悲しくなんかない。最高に嬉しいわけじゃない。だけど、どうしても泣いてしまう。それでも、彼女は涙を止めようとは考えない。

ずっと、泣いていたかった。許される限り、この暖かい腕の中で。

彼女は抱きしめる腕に力を込める。

「ごめん」

小さく、少年の声が聞こえた。少女は激しく首を振る。

「……ズルいよ」

自分の涙が、すがりつく少年の服にどんどん染み込んでいっているのが分かる。しかしサラはそんな事を気にするような気持ちは微塵も起こらない。

染み込んだ涙は冷たい。だけど、そんな事は忘れてしまうほどに何もかも暖かく感じた。身体も、心も、少年も、限りなく静かなこの空間も、小さくてたくさんの涙も。

嗚咽で上手く声が出せない。サラは、何としてでも声を絞り出そうとする。

それでも、何も言えない。何か言いたいのに、言葉が出てこない。

突然、大きな風が吹いた。

暖かくも、冷たくもない、けどとてつもなく強い風だ。サラは思わず強く目を瞑り、離れないように少年に強く抱きついた。

今まで音のまったくなかった世界は、突如乱暴な風の音に支配される。そしてそれは何もかもを吹き飛ばしていこうとしていた。

バラバラと世界が崩れていく。雲は、一瞬で弾けるように消えていった。草原の草は、ザワザワとその身体を揺らさずに、先っぽの方から、霧のようになって消えていった。どこまでも続くゴツゴツした砂利道は、巨大なハンマーで壊されるかのように消えていった。海のように透き通っていて深い青空は、黒い絵の具で乱暴に上塗りされていくように消えていった。

全部が真っ黒になっていく。サラは顔を少年の胸に埋めていて、その異変には気が付かない。少年は、自分たちの周りがどんどん消えて、変わっていく様子を、ただ呆然と眺める。

少年も、無意識にサラを強く抱きしめた。そして、目を瞑る。

「サラ……！」

抱きしめているのに、離れたくないのに、サラは少年の声が遠くから聞こえているような感じがした。

「サラ……！」

何度も、何度も名前が呼ばれる。だけど、その度に声は遠ざかっていく。これほどまでに近くにいるのにも関わらず。

サラは目を開けなかった。開けてしまったら絶対にダメだと、根拠はないのに、必死だった。抱きしめる腕の力は、限界を感じ取っても、それでももっと強くしようと、何度も力を込める。

やがて、風が止んだ。

少年の声はもう聞こえなくなっていた。

この世界の暖かさも、もう感じなくなっていた。

サラはゆっくりと、誰にも、自分にも気付かれないように、目を開ける。出来れば何も見たくないと、ほんの少しだけ。

目に飛び込んで来たのは、真っ黒な空間だった。

次の瞬間、抱きしめていたはずの身体が消える。

サラの腕は、初めから何も抱きしめていなかったと彼女に錯覚させるほど、冷たい宙を空しく舞い、彼女は勢い余って前のめりに倒れてしまう。

黒色の地面は冷たい。

彼女はゆっくりと身体を起こし、立ち上がって、周りを見回す。そこはさっきまでの場所と同じような、無限に広がる世界だった。けどそこは自分以外が何もかも真っ黒で、何もない。ただ、自分の姿だけは真っ黒で光がないはずの空間なのに、はっきりと見える。

この世界にいるのは、自分だけだとサラは分かった。

両手を見る。

先ほどまでの温もりは幻のように消えてしまっていた。けど、不思議と悲しくなかった。もう、何も感じられなかったからだ。

ふと、サラの頬に、たった一粒だけ涙が伝う。

サラは自分に流れる涙に気が付かず、涙はそのまま、耐えきれずに空しく手を滑らせて崖から落ちたように頬から離れ、黒色の地面に消えていった。黒色の空間を、どこまでも落ちていった。

冷たい涙だった。

やがて、夢は終わった。

「お母さん、今は眠っちゃってるよ」

ノックもなしにいきなり入って来た英二に、恵美はもう慣れっこのようで、窓際に置かれた見舞いの花の水を取り替えながら兄の方も見ずに彼女は教えた。

仕事を早く切り上げ、せっかくだからまだ日が沈み切らないうちにと急ぎ足で病室に来た英二は、眠っている母を見て拍子抜けしたように肩を落とす。

病室には眩しいほどの夕日が差し込み、部屋の物だけではなく、英二までオレンジ色に染め上げていた。

ふと、英二は窓際に立つ恵美に目を移す。

恵美は水を換え終えて、丁度、透明なガラス製の、万華鏡のような美しい模様が彫られた花瓶に花を生ける所だった。

オレンジ色の空を背景にして恵美のシルエットが、夕日の光が眩しく反射する花瓶を持ち上げる。光を反射する花瓶はさながらもう一つの太陽に見え、人間が太陽に触れている神秘的な光景だと、英二は思わず見とれてしまう。

「最近、お母さんよく眠るようになったんだ」

ふと、花瓶を窓枠の所に置いて、恵美は花を見つめながら言った。その目はどこか寂しげな感じがしたが、夕日がそういう雰囲気になっているのかもしれないと英二は思う。

「……そうか」

そう一言だけ呟いて、英二は花瓶に目をやる。

枝先に咲く花のようで、花瓶にはわずかに二、三本ほどしか生けていなかった。

夕日のせいで分かりにくかったが、その花が白という事は何となく分かる。見た事のある花だったからだ。だが、どうにも名前は思い出せない。以前、この花の名前を知る機会が確実にあったはずなのに。

英二は人差し指で控えめに頭を搔く。

花はどこにでもある花のようには思えなかった。そこまで豪華で立派な花ではないが、いかにも清楚でか弱そうで、雨に打たれてもしたら忽ちその純白で染まりやすい花びらを散らしてしまうのではないかというほどだ。

おそらく、花屋を通りかかった時にでも見かけたのだろうと英二は結論づける。こんな花、徹底された管理の下でなければ育てられないだろう。

「何かあったの？」

些細な疑問を考えている顔が深刻な問題を抱えている顔に見えたのか、恵美が心配そうに聞いてきた。

「え？ あ、いや。何でもないよ」

英二はとぼけるような返事を返した。

その返事のせいか、恵美は不信感を露にした顔を英二に向ける。しかし追求するという事はせず、また英二に背を向けて、花を生ける際に出た新聞紙などのゴミを片付け始めた。

お互いに無言になる。これは英二にとって、多少なりとも気まずい時間になってしまい、つい

つい、また頭を搔く。

英二は窓際で片付けを続ける恵美から視線を外し、眠っているサラの隣まで歩を進めた。そして壁際に置いてあった椅子を引き寄せ、彼女の顔がよく見える位置に座る。

さすがに直接夕日の光が彼女を照らしているわけではなかったが、それでも顔や髪の毛は淡いオレンジ色に染められていて、太陽のような優しくて眠たくなる暖かさが宿っているようだ。

「アメリカに行かないんだよね？」

唐突に、恵美は聞いてくる。言葉に反応して英二が恵美の方を見ると、彼女は丁度、片付けたゴミをゴミ箱に捨てる所だった。

「お兄ちゃん？」

返事がない英二に顔を向け、恵美が不思議そうに聞いてくる。

「ああ。行かない」

間を入れずに、英二はすぐに返事をした。素っ気ない返事だった。にもかかわらず、恵美はその言葉を聞いて微笑む。

てっきり、母と似たような反応を示すだろうと思っていた英二は、その予想もしていなかった反応に目を丸くした。

「よかった。もし行ったら、お母さんきっと悲しんでたよ。私も、お兄ちゃんのその言葉、聞けて嬉しい」

そう言って恵美は、また花に顔を向けた。ほんの少し、英二はキョトンとする。

だがやがて、英二は顔をほころばせると同時に、サラの方を見た。

「……母さん想いだな」

「え？」

英二は呟くようにそう言ったが、それは口を滑らせて言ってしまった言葉らしく、誤摩化するように「何でもない」と言った。

恵美は怪訝そうな顔を英二に向ける。

「なあ。その花、なんていう名前なんだ？」

唐突に、英二は窓際を指差してはぐらかすように訊いてきた。煮え切らない態度に恵美は一瞬、更に険しい顔つきになるが、すぐに無駄な事だと気づき、軽い溜め息をつく。

「この花？」

恵美は振り返って花を見つめ、撫でるように触る。嬉しそうに花が震えた。それを見てなのか、彼女も微笑む。

「綺麗でしょ？ ハナミズキって言うのよ、この花」

英二は思わず声を漏らした。

「そうか、ハナミズキか。聞いた事あるよ」

「お母さんがこの花を見たいって言うから、花屋に取り寄せてもらったんだ」

恵美が花を見つめながら言う。

英二は、やはりハナミズキはどこかの花屋で見かけたのだと納得した。しかし、どうして母がそんな事を頼んだのか分からない。

「どうして母さんが？」

「故郷で咲いてた花なんだって」

恵美は相変わらず英二を見向きもせずに花を見続けていた。

英二は眉をひそめる。

「そんな話、聞いた事ないぞ」

「私も。お母さんが故郷の話をするなんて、ちょっとビックリしちゃった」

ようやく恵美は英二の方を向き、黙り込んでいる彼に口を開いた。

「でもどうでもいいじゃん。お母さん、すごく喜んでくれたんだよ」

恵美が嬉しそうに話す。その声を聞いて、英二はすっかり気が抜けたようで、一つ、軽く息を吐いた。

「まあ、そうだな」

そう言って、英二は改めて花を見る。

夕日はすでに黒い町並みに顔を半分隠していて、先ほどよりも深く、燃えているような赤が窓から差し込み、その光を浴びている花たちは太陽に恋してしまっただけでなく見とれているかのように、ただ静かに佇んでいた。

「……綺麗な花だな」

英二は呟いた。

恵美も振り返って花を見つめる。花瓶の水は染められたかのように赤くて、反射した光が眩しかった。

やがて恵美は微笑むと、ゆっくりと「うん」と頷く。

サラの目が覚めたのはすっかり日が落ちてしまってからだった。

蛍光灯の光がやけに眩しく感じ、目を細める。

寝過ぎたせいなのか、身体のあちこちが少し痛む。その痛んだ身体に顔を少しだけ歪ませながら、おもむろに上半身を起こすと、朝と同じように恵美がベッドのすぐ近くに座っていた。しかし今度は眠ってはいない。

恵美は何かの雑誌を読んでいて、サラが起きたのが分かったと雑誌を閉じて、椅子を更にサラの近くまでガラガラと引っ張ってきて座る。

「お兄ちゃんもいるけど、さっき先生の話聞きに行っちゃった」

バッグに雑誌をしまいながら恵美が口を開く。

サラは窓際に目を向け、ハナミズキを一瞥してから白いカーテンが閉められた窓を見た。

「……そう。なんか、ずいぶん眠っていたみたいね」

「呆れるくらい、ぐっすりだね」

恵美がわざとらしく生意気に言う。サラは「やれやれ」と首を振って、苦笑する。

ふと、恵美が嬉しそうに口を開いた。

「そうだ。お兄ちゃんもね、ハナミズキの事、綺麗だって言ってたよ」

「そう、よかった。英二、花とかにはあんまり興味がないから」

サラも嬉しそうに言う。

「だね。飾り付けみたいな事は嫌いだし。あ、でも機能性重視だって作る車はこれでもかかってくらい数字で飾り付けられてるよ。ほんとに、数学がお友達の人にはわけ分かんない」

恵美が皮肉っぽく肩をすくませ、サラはそんな彼女に対して呆れた笑みをこぼす。すると恵美は腕を組んで、文句ありげに抗議の目をサラに向けた。

サラは恵美から顔をそらして笑った。

思わず微笑んでしまうような、無邪気で、子供っぽい笑い方。

恵美も、少しだけ表情を緩める。けどすぐに、彼女は視線を落として寂しげな顔を見せた。それを悟られないように、無理に微笑もうとしているのが、よく分かる。

もちろん、サラもそんな恵美に気付いた。

娘の顔つきに心配になったサラは、ふと、笑うのをピタリと止めると、思い切って、しかしなるべく明るくなるように努めて尋ねる。

「恵美、どうして今朝泣いてたの？」

「え……？」

恵美は初めは意味が分からないと目を丸くしていたが、次第に困惑した表情になっていき、不意にサラからの視線を避けるようにして顔を俯かせた。

サラも目をそらし、溜め息をつく。

「言いたくないのなら、言わなくてもいい。でも出来るのなら、話して欲しい」

サラの言葉を最後に二人とも黙り込んでしまい、狭い病室に息苦しくなる空気が漂い始める。

無機質な蛍光灯の光が空間を固まらせていたのも原因なのだろう。

恵美はゆっくりと顔を上げながら、ちらとサラを見た。

サラは掛け布団の上に手を組んで置いていて、目はその手を見つめている。表情からは感情が何も読み取れず、ただ静かに呼吸をしているだけだ。

恵美はサラを見つめたまま、口を開かない。

ふと、一粒の涙が零れ落ちた。

恵美はサラの頬の、彼女にも気付かれないようにして静かに流れる小さな光に息を呑む。同時に、ドキリと心臓が鳴り、胸が張り裂けそうになる。

そして、恐る恐る口を開いた。

「大学を、辞めるの」

サラはゆっくりと恵美に視線を移した。そして静かな声で訊く。

「どうして？」

恵美はサラから視線をそらす。そして消え入りそうな声で言う。

「諦めるの。画家になる事」

「……どうして？」

さっきと変わらない調子でサラは言った。だけど少なからず、彼女は自分の感情を押し込めていた。心臓が高鳴っているのも、彼女にはよく分かっている。

ふと、恵美は顔を上げる。

「お兄ちゃんに、迷惑ばかりかけたくないの。ほら、画家って成功する人なんか一握りでしょ？ だったら、経済学とかそういうのを勉強して普通のOLにでもなった方が、安定して生活出来るし、お母さんだって安心でしょ？」

嘘をついている明るい声だった。無理に繕っている笑顔だった。そして、それらはサラには意味がなかった。

恵美はいつものように調子を合わせて笑ってくれないサラを見て、思わず自分の笑顔を消してしまう。咄嗟に目をそらそうとするが、それは出来ない。静かに自分を見据えるサラの目が、そうさせてくれない。英二と限りなく似ている、威圧的な目だった。

「夢じゃないの？」

恵美は黙ったままだ。サラは問いたですように口調を強める。

「画家になる事、夢じゃないの？」

「もう夢じゃないの……！」

堪えきれずに立ち上がって、掠れ声でそう言った瞬間、恵美は声を詰まらせた。サラはその勢いに吞まれ、思わず口をつぐんでしまう。恵美は涙を流すのを必死でこらえて、絞り出すように、叫ぶように言葉を続けた。

「もう意味が無くなっちゃったの！ 絵を描いても！ 何もかも！ 何にも、描けなくなっちゃったの……！」

「いったい何があったの、恵美」

胸がえぐられるような叫び声を上げる恵美に、サラは心配そうに、優しく手を握る。恵美の身体は苦しそうに震えていた。サラはもっと不安になる。これほどまでに弱々しい娘を、サラは見

た事がなかった。同時に、サラは心の底から自分を軽蔑する。どうして気が付かなかったのだ。こんなに苦しんでいるのに、どうして支えなかったのだ。なんて馬鹿なのだ、自分は。

サラは握った手に力を込める。

「恵美、お願いだから話して。私、何でもするから。だから……」

突然、恵美はサラの手を振り払った。

「お母さんに何も出来るわけないよ！ 何にも知らないで……私は……」

肩を静かに上下させながら、恵美は黙り込む。サラは呆気にとられていた。そして胸の奥底から渦巻いてくる、何か漠然とした恐怖に、身体を拘束されていた。

ふと、恵美は一瞬下に視線を向けたかと思うと、すぐにサラに視線を戻した。その目は底のない海のように深くなっていて、空の様々な光が混ざり合って消えていくようだった。

「ゴメン、お母さん。私、もう帰るね」

「恵美……！」

サラの呼び止めは恵美の耳にはまったく入ってこなかった。彼女は足下のバッグを乱暴に引っ掴むと、逃げるように病室を後にした。

サラは咄嗟に、ベッドから降りようとする。掛け布団を乱暴にはね除け、彼女はベッド脇に置かれたスリッパに手を伸ばした。

「母さん？ どうしたの？」

いつの間にか病室の扉を開けて入ってきた英二は、急ぎ立てられるようにスリッパを履いて立ち上がろうとするサラを見つけて怪訝そうな顔をする。だがサラはベッド脇の手すりに手をかけて立ち上がった瞬間、崩れ落ちるようにその場に倒れ込んだ。「母さん！」と英二が叫んでサラのもとに駆け寄り、肩に手をかけ安否を確認する。

サラは自力で身体を起こした。それを見た英二は心配そうな顔を彼女に向けたまま、肩を貸して慎重にベッドに座らせる。

「まだ無理しちゃダメだよ。いったい何があったの？」

英二は顔を俯かせるサラと同じ視線の高さになるように膝を曲げて、話しかけた。だがサラは口を開かなかった為、続けて英二が口を開く。

「恵美が泣きながら病室から出てきて、俺が大声で呼んだのに無視してどっかに行ったんだ。ねえ、恵美と何があったの？」

「……恵美が、大学を辞めるって」

顔を俯かせたまま、サラが呟くように言う。それを聞いた英二は目を丸くした。

「恵美……話したんだ」

「知ってたの？」

サラが顔を上げる。その表情には、悲しみが混ざり合ったような静かな怒りの色があった。

英二はサラを真っ直ぐ見つめたまま、頷く。サラはより一層悲しみを深くした表情で訴えかけるように口を開いた。

「どうして？」

「恵美が自分で話すって決めてたんだ。だから、俺は何も言わないで黙ってた」

「そんな、勝手すぎる！ どうして私に相談の一つもしなかったの？ どうして、せめて英二は私に話してくれなかったの？」

「心配かけたくなかったんだよ。せめて母さんが入院している間だけは。だから、恵美の事は怒らないでやってくれよ。恵美だって、たくさん悩んだんだ。俺に泣きながら何度も電話をかけてきた。全部、黙ってた俺が悪いんだ、母さん。だから、恵美の事は怒らないで……」

「私はあなたたちの親なのよ！」

サラは叫んだ。心の底から、訴えかけた。だけど、それ以上の言葉は出てこない。そして英二はというと、小さく俯き「ゴメン」と一回だけ悲しそうに言うだけだった。

ふと、カーテンが僅かに揺れる。それにつられるかのように、蛍光灯の真っ白な光に照らされたハナミズキが涙を流すように一枚だけ、白く塗られた苞を散らした。だが、二人はそれに気が付かなかった。

サラは頭を抱え込んで、悲しみを押し込めるように呟く。

「……どうしてあなたたちは謝るの？ どうして誰も私を怒ってはくれないの……？」

窓の外に吹いているはずの冷たい風の音でさえ聞こえるほど静かな空間ではあったが、サラのその言葉は目の前にいる英二には届かなかった。

英二は先ほどサラのせいで倒れてしまった椅子を起こして、サラの近くまで引き寄せて座った。そしてただ呼吸をするだけの時間が続く。普段呼吸をする事なんか忘れていた為か、とてもゆっくりと呼吸をしているように感じられた。

「英二」

突然の母の呼びかけに英二が顔を上げると、丁度彼女も上げた所で、二人は同時に目が合う。サラは一つ、溜め息とも似つかない息を静かに吐いてから口を開いた。

「恵美はどうして大学を辞めたいなんて思ったの？」

英二はサラから目をそらす。その時一瞬だけ彼は顔を曇らせた。だがそれはサラがまったく気が付かないほど僅かな時間で、英二は少し困ったような顔つきで答えた。

「それは分からないんだ。どうしても、恵美はその理由だけは話してくれなかった。何が起こったのかは、俺にも分からない」

「そう……」

サラは顔を俯かせる。

また静寂が漂い始めた。英二は何とかして母を元気づけたかった。ほんの少しでもいいから、笑わせたかった。これほどまでに母らしくない母を見ているのはもう限界だった。しかし、所詮自分には何も出来ないのだと英二は感じる。いつも、母が笑えば自分が笑った。自分が笑って、母が笑った事なんか一度もない。恵美とは違う。

自分の不甲斐なさに嫌気が差す。沈んでいく船の錨を必死に引き上げようとしているのに、錨は空しく沈んでいくような気分だった。

突然、サラが顔を上げて口を開く。寂しげな顔をしていた。

「恵美の描いた絵、覚えてる？」

英二は「絵？」と聞き直してから考えるように言い始める。

「最後に見たのは、俺が大学に行く前だね。恵美は……中学一年生だったかな？ 確かあの絵は

、だっ広い野原に一輪の花が咲いてる絵だった。でも、何の花だったかは覚えてないや。まだ描きかけで、色も塗られていなかったから。そうだ。あの絵はさ、鮮やかだったけど、何か物足りなかった。漠然とだけど、その事は覚えてる」

サラは膝の上で組まれた両手を見つめたまま、静かに頷いた。

「そう。恵美の描く絵は何を描いても小さく映った。たとえ百万本のバラをキャンバスいっぱい描いたって小さかった。恵美の絵は、どうしても世界を切り取ってしまった絵になっていたわ。だけどそれでも、恵美の描く絵は綺麗だった」

不意に、サラは英二に顔を向ける。

「英二は知らないでしょうけど、恵美は花を描くのが大好きなの。小さかった頃から、ずっとずっと花ばかり。その数えきれないほどの花束を私にプレゼントしてくれた。私は、そんな恵美の花が大好きだった」

「俺も好きだったよ。恵美の描いた絵。恵美の絵は、恵美の笑顔がそのまま乗り移ったみたいな絵だったから」

英二が囁くように言う。サラは再び視線を両手に戻した。

「……私はね、英二。恵美に画家になるって言われた時、本当は嫌だった」

英二は驚いた顔をサラに向ける。

「だけど恵美が楽しそうに絵を描く姿を見て、自分を叱りつけた。私は親なんだから、精一杯応援しなさいってね。それでようやく恵美の絵が綺麗に見えたの。私にとって、世界一にね。だから、私は恵美に画家になる事を諦めて欲しくない。これからもずっと見続けていきたいから」

サラは英二に顔を向ける。彼女は自嘲気味に微笑んでいた。

「でもそれは、ちょっと勝手よね。ゴメンなさいって恵美に伝えて。恵美がこんなに苦しんでいたのに、何も気付けないで。恵美が何も言いたくないのなら、何も言わなくていい。私は怒ったり、問いつめたり、そんな事しないから。だから、いつも通りに、お見舞いに来てって」

「……分かった」

しばらくの沈黙の後、英二はそう言って頷いた。

そして再び静寂が漂う事はなく、英二の言葉にほとんど間を空けずにサラは口を開いた。

「それと英二。一つ、お願いを聞いてくれる？」

「何？」

英二は微笑んで訊く。無理に作った笑顔だったが、サラは気が付いたような様子は見せなかった。

「えっとね、明日家まで行ってきてくれない？」

「……別にいいけど、どうして？」

英二は拍子抜けしたような顔をして首を傾げる。切なげな口調の母から出たその言葉は、しばらく英二の耳の辺りをクルクルと停滞するように回っていた。

「どう説明したらいいのかしらね。とてもおかしい話だから……」

サラは困ったように首を傾げ、加えて落ち込んでいるかのように溜め息もついた。英二はそんな母を怪訝そうに見つめる。ふと、サラは手を掛け布団に伸ばし、それを自分の肩にかけてから

、戸惑い気味に口を開こうとする。だがそれを見た英二はサラの言葉を遮って口を開いた。

「あ、待って。何か暖かい飲み物でも買ってくるよ。少し冷えてるからね、この部屋」

サラは拍子抜けしたように、力なく笑う。

「別に気にしないでいいのに。暖房入れればいいじゃない」

「いいから」

英二は軽くあしらうように少しだけ微笑むと、席を立った。そしてスーツのポケットに手を当てて財布がある事を確認してから、扉に向かう。

「そうだ、母さん」

扉に手をかけた瞬間、英二が何か思い出したかのように立ち止まった。サラは無言で顔を向ける。

「恵美はきっと、落ち着いたら全部自分から話してくれるよ。ただ、その決心がつくまで時間がかかるかもしれない。でも恵美は必ず言ってくれると思う。だからそれまで、気長に待っていてくれないかな？」

「もちろん」

サラは英二の問いかけに疑う様子など微塵も見せず、素直に頷いた。英二は安心した様子を見せる。

「ありがとう。じゃあ、行ってくる」

廊下の冷たい空気が部屋に入ってきた。

英二は一人だけの病院の廊下を歩く。重たい足音だけが、木霊する。そこは四角くて、真っ直ぐな白色の空間。歩めば歩むほど、全てがゼロに戻っていつてしまうような不思議な空間だった。だから歩みを止めれば、時間が止まる。ゼロの地点はずっと眺める事にはなるけれど、決してゼロには戻らない。だけどそうしたら、自分は一人、取り残されてしまう。それはどうしようもなく怖い。だから進む。進めば一緒に歩める。近くにいられる。だけどいつか、離ればなれになる。結局、人は救われないのか。こんなに透明な世界で生きるのに。手の温もりは、透明の色に溶けていく。

生きている事が夢であれば良かったのに。

英二はただ、真っ直ぐに歩き続ける。母は家に行って何をやって来て欲しいのだろうか。でもそんなに考えた所で、自分には分かるわけがない。分かるわけがないのだ。

少し先の突き当たりで、非常階段の場所を示す非常灯が、真っ白の廊下に緑色の光を淡く反射させていた。

僕たちのいく世界

<http://p.booklog.jp/book/64721>

著者 : yamin

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yamin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64721>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64721>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ